一　西スマトラでの青少年時代

故郷パリアマンの町

私は1910年3月21日の月曜日、午前11時30分に西スマトラ・パリアマンの町で生れた。

母アミナは17歳の時に結婚した。父のアジュディン・ゲラン・スタン・バギンドは、パリアマンの布地商であったが、1913年に商都パダン市に移った。そこはパリアマンよりずっと大きく、人口も約5万ほどであった。パリアマンの町は2万人ほどの人口であった。

私はきわめてイスラーム信仰の篤い母の手で養育された。彼女は父には黙って、食物や布類や金を貧しい人びとに施していたので、“シ・ミナー・カヨ”（金持のミナー）という仇名をつけられていた。しかし彼女は一方ではとても節約家で、やぶれた枕や古い服などもよくつくろっては使っていた。サロンの残り布とか、さまざまな大きさや色の木綿の残り布もとっておいて、布団やベッドカバーに仕立てていた。食物についてもきびしかった。一粒の米も、魚の一片も、野菜の切れはしも、必ずとっておくか、近所の貧しい人たちに分け与えた。食物を捨てるなど、とんでもないことだった。

後年、ある時私が母に、なぜ古い缶をとっておくのかと聞いたところ、彼女の答はこうだった。「息子よ、お前は知らないのですよ。そういうものがどんなに尊いかを。私たちは独立後貧しくて、入れ物を買うお金もないのです。私はこういう缶を親類の人たちに分けて、からし粉や塩やそのほかの香味料入れに使ってもらうのです。」

父は、母と反対に浪費家だった。彼は目先のきく商人で、短期間で大きな資産を作りあげた人だった。そしてそのお金を宗教的な慈善とか、モスクとか、貧乏な人のための学校とか、宗教儀式などのためにどんどん寄付した。また父は見栄っ張りだった。2000ギルダーでハドソン車を買ったり、1000ギルダーで競馬用の馬を買ったり、その上また1000ギルダーで自分が乗る馬を2頭買ったりした。それだけのお金は、当時としてはたいした額であった。そして父は、私にオランダ語やオランダの生活習慣をおぼえさせようと、オランダ人の家に下宿させたが、それも月に75ギルダーかかった。

パリアマンは近隣の村々プランパカイ、プラン・シベルト、さらにはシボルガなどと交易の盛んな土地であった。町の人びとは主としてコプラ、塩、漁業などで生計をたてていたが、後背地の村々との衣類の交易もさかんだった。コプラはパダンの港であるテルル・バジュールを経由してオランダに輸出されていた。

5、6歳の頃から、母は私を一週間に3度、シャリファ・ウミ先生の経営しているイスラーム塾に通わせた。そこは家から半キロほどの道のりで、その授業は朝6時半から8時まであり、そこで私は初めてコーランの祈りをおぼえた。仲間には男の子と女の子と合わせて12

人がいた。私はコーランの言葉を大きな声で吟ずるのが大好きだった。アラビア語の発音はそう難しいとは思わなかったが、読み方の抑揚は問題だった。聴く者の心の奥の、宗教的感情に訴えるように読まなければならなかったからである。

私はそれに苦しんだけれども一方では心配だった。教えるウミ先生は50年輩の婦人で非常にきびしかった。いつも右の手に杖をもって、私たちの誰かが読み方を間違いでもすると、背中やももをその杖でたたくのだった。女の子も容赦されず、泣きだすものもいた。幸い私はたたかれることはなかった。それどころか4ヵ月間の勉強のあいだに、私はウミ先生からたびたびほめられたものである。こうして私たちは読むことは習ったものの、そのアラビア語の意味はまったく分からなかった。字句の意味の説明はひとつもされなかったからである。

私はじっとおとなしくてしていることができない子供だった。凧をあげにいったり、泳ぎに行ったり、浜辺へ行って漁師から小さな魚をもらったりした。母がきっといけないというと思って、母の許しを求めることもしなかった。サッカーをするのにも、親類の家の庭の中で少ししかできなかった。凧あげやサッカーのあとでは、たいてい近くのモスクの池へ行って泳ぐのだっだ。実際のところ私は泳げなかった。ただあまりきれいでない泥水に何時間もつかって顔を真黒にやけさせて家へ戻るのである。家へ帰ると母は「お前の顔はフライパンのように真黒だよ」といって叱ったが、私は黙って食事をするのがいつものことだった。

ある日の昼食は、ココナッツミルクとチリソースで煮た魚にキャッサバの葉入りの温いご飯で、とてもおいしかった。私はサッカーをしたあとで腹がぺこぺこだったし、思わず盛りすぎてご飯を床にこぼしてしまった。ご飯をこぼしてはいけないとは、いつも母からいわれていたことだった。そのときも母は、いきなり私の左ももをぴしゃりと叩き「ご飯を捨ててはいけないよ。一年に一度しかお米はとれないんだよ。ご飯を踏みつけたりするとご飯は泣く。そしてお前はなかなか稼げなくなるんだよ」といった。母のたたき方はそれは強く、4本の指の跡がちゃんと残るほど痛かったことをおぼえている。私は黙って涙をこらえた。

私は強情でつっぱり屋なので、母の忠告や警告は馬耳東風と右から左へ聞き流していた。5歳のときムスリムとして割礼をうけることになった。それはとても痛かったし、何時間もベッドで寝ていなくてはならないなど、たまらない苦痛だった。その処置には、ココナッツの殻の粉をつけるのである。私の心はサッカーの遊び場に飛んでいた。そして私は、母の許しもえず、こっそり家を抜けだした。朝の10時頃で雨がしとしとと降っていた。遊び場は、500メートルほど離れた叔母の家の裏庭だった。もう友達も待っていて、私たちは早速ゲームを開始した。ところが、ゲームが最高潮に達したとき、私の目の中にいきなり母の姿が飛び込んできた。母はカンカンに怒っていた。「まだ傷は治っていないんだよ。もし出血でもしたらお前は死んでしまうよ」と母はどなった。「さあ、すぐ家へ帰りなさい。」

ゲームは中止になった。母は叔母の家へ入っていった。私は家へ帰らず、いつも水浴びに行くモスクへ行った。雨はまだ降りつづいており、私の服はびしょぬれだった。折角のゲー

ムを中止させられて、私はとてもがっかりして歩きながら、母に対する怒りがこみあげてくるのをおぼえた。半時間ほどのち、まだ下を向いてぶつぶつぼやきながらゆっくりと私は川へ行った。川岸には誰もいなかった。川の流れは速く水かさも増していた。しかし私はそれにまったく気がつかず、上着をぬぎ、まだ心に怒りをもやしながら川へと飛び込んだ。足が底につかない。私は何かにつかまろうとあわて、水をがぶりと呑み、息をつこうとしたが、身体は流されてしまった。約3メートル、ようやく私は岸に横たえてあるココナツの幹をつかみ、それにすがって必死で岸に這い上がることができた。そこで私は服をつけ家路についた。もし川の流れがもう数メートル私を押し流していたら、私は5キロ先のインド洋に溺死体となって発見されていたにちがいない。この少年の日のおそろしい経験は、母にはついに言わずじまいだった。もし言ったらどんなに怒られるかわからない。これは私が母の言いつけを聞かなかったために、その半時間後にくだされた罰だったのだ。私は心の中で母に謝って罪を許されたのだった。

それは私が祖父につれられて、パリアマンから200キロほど離れたパヤクンブの叔母をたずねたときのことだった。出発の2日まえ、母は私に、決して汽車の窓から頭を出してはいけないといいきかせた。そして出発のときにも母は同じ言葉をくり返した。汽車がバタン・アナイに着いたとき、あたりの風景はすばらしかった。連なる丘は奥深い森林におおわれ、谷底には水晶のように澄みきった流れがあって、さまざまな形の大小の真黒い岩が両岸につらなっていた。私は席に座っていてはよく景色が見えないので、もっとよく見ようと思って、座席の上にひざまづき、左手で窓わくをつかんで身を乗りだそうとして思わず手をすべらせた。あっと思った瞬間、私の身体は半分窓の外に落ちかかり、私は恐怖のあまりもう駄目だと思った。幸いにも、前の席に座っていた叔母が、私の服の衿前をつかんで引き戻してくれたからよかったものの、もし叔母が居眠りでもしていたら、私の身体は川岸の岩に叩きつけられ、そのままインド洋に流されていったにちがいない。私はおとなしく叔母のお叱りを受けた。母の警告を受けてから2時間で、それを聞かなかった罰がくだったのである。パリアマンを午前10時に出発した私たちがパヤクンブに到着したのは、午後1時30分だった。マレーの格言では「極楽は母の足もとにある」という。

母は私にシ・タンビという仇名をつけた。真黒なインド少年のテカテカ顔という意味である。親類の者たちは、私が日蝕のときに生まれたにちがいない、といっていつも私をからかった［当時のミナンカバウ社会の状況を知る上で、ムハマッド・ラジャブ（加藤剛訳）『スマトラの村の思い出』めこん、1983年は重要な記録である］。

日本人商人と日本人居住地

私はときどき、一人の日本人の行商人が商品を積んだ荷車をゆっくりと押しながら、家の前の通りを通っていくのをみかけた。長袖の白シャツを着、灰色がかった長ズボンをはいた男だった。靴をはいていたか、それとも下駄だったかは記憶にない。背は高い方で、身体つ

きもがっしりとし、卵型の顔は熱帯の太陽にさらされて真黒だった。髪の毛には白いものがまじっていた。もう60に近かったろう。商品は皆にもう馴染みのもので、ビスケット、甘い菓子、おもちゃなど、子供たちの喜ぶものばかりだった。年をとった女たちはその日本人に好意的だった。

「あの人はまったくよく働くよ。町から町へ荷車を押してって、いったい一日いくらのもうけになるのかしら」などと彼女らは噂した。一日中、暑い太陽の下で車を押して歩くのはさぞつらいことだったろう、とわれわれは彼に同情した。彼のビスケットはおいしかったが、ほかの菓子は少々甘すぎた。しかし子供たちはそれを好んだし、おもちゃも大好評だった。日本人はとても質素な生活をしている、という評判も好意的だった。

その行商人は週に1、2度、朝10時ごろに私の家の前を通った。人びとは彼の働きぶりを賞賛し敬意を払っていた。

パリアマンの北10キロばかりの所に海岸沿いの町バダンカペがあった。（バダンは木、カペは木綿の意である）。このバダンカペには日本人の居住地があるという噂で、彼らはパダンから移ってきたのだということだった。ときどき何人かの日本人が、米、野菜、砂糖、灯油などといったものを買いにパリアマンにきたが、そのうちの何人がバダンカペからくるのかは分からなかった。日本人が何をしているかも分からず、われわれは、彼らはただそこへ保養にきているのだろうとか、その地の名前が木綿の木だから綿の木の栽培を始めようとしているのだろうとか、推量するだけだった。いつからそこに日本人が住み始めたかも知られてなかった。多分20世紀の初めかあるいはそれよりちょっと早い時期だったかもしれない。とにかくその居住地は、スマトラの西岸一帯では唯一の日本人居住地だった［戦前期インドネシアの日本人社会については、以下を参照。ジャガタラ友の会編『ジャガタラ閑話―蘭印時代邦人の足跡』非売品、1978年］。

「ミナンカバウ」という言葉について

14世紀の昔、ジャワのマジャパヒト王朝は隆盛をきわめた帝国であった。そしてその威勢はスマトラをもその支配下におこうとし、優勢な軍勢をスマトラの西海岸に上陸させ、無条件降伏を要求した。スマトラの人びとは、強力なジャワ軍にとうてい太刀打ちできないことを知っていた。そこで彼らは敵軍に対して一つの提案をもちだした。戦争になれば大変悲惨なことになり多くの死傷者がでる、そこで人と人とが戦うかわりにジャワの水牛とスマトラの水牛とを戦わせたらどうか、というのである。もしジャワの水牛が敗けたら、ジャワ軍はスマトラから撤退し、スマトラの水牛が敗けたら、スマトラは降伏するという条件であった。

ジャワ軍はそれを承諾し、すばらしく巨大で猛だけしい水牛を広場に引き出してきた。スマトラの方で用意した水牛は、数日間えさをやらずに空腹にさせ、その鼻先に鋭い角を結びつけた仔牛だった。2匹の水牛が広場に引き出されるやいなや、空腹に耐えかねた仔牛は、

乳ほしさに相手の水牛めがけて突進していき、鋭い角のついた鼻づらでがむしゃらに相手の腹部を突きまわったので、さすがの巨大な猛牛も、傷の痛みに耐えかねて倒れてしまった。自分たちの水牛の勝利を確信していたジャワ人たちは失意落胆したが、約束は約束である。おとなしく兵を引揚げていった。それが西スマトラの地とそこに住まう民族ミナン（勝利）カバウ（牛）という言葉の由来である。

パダンで過した少年時代

オランダ人の経営する小学校には、7歳にならなければ入れてもらえなかった。そこで私は、6歳半になったとき、オランダ人の経営するフローベル学園の幼稚園に入った。そこで私は、オランダ語での数え方や挨拶の仕方、オランダ語の唱歌などを習い、さまざまな箱とか棒とか、またはいろいろなボールで遊んだ。その幼稚園は午前中だけで、先生は皆オランダ人の女の先生だった。幼稚園が終わると私は、昼からはイスラームとアラビア語の学校「アービタトル・イスラミア」へ行って、宗教教育を受けた。そこではアラビア語、イスーラムの5信条、コーラン信仰、すなわちアッラーは唯一の神であり、モハメッドはその神の使者であること等を学んだ。

夕方にはまた近所の子供たち8人と一緒に週3回、父の店の傍の部屋で、コーランの読誦を勉強した。先生はイブラヒム先生で、きわめて寛大で忍耐づよい老人で、杖を手に私たちを打ったりすることは全くなかったが、私たちの読誦の声が小さくなってくると、傍にまわって杖でなぐりつけるのは私の父であった。父は、コーランの章句を大きな声で唱えれば唱えるほど、より豊かな繁栄と好運が招かれ、自分の店の売り上げが増すと固く信じていた。私は4ヵ月かかって一応コーランを終えたが、結局意味は全然分からずじまいだった。先生も意味をよく知らなかった。コーランは3回終わりまで唱えなければアラーの恵みは受けられないということだった。

私がアダビア小学校に入学を許可されたのは、1917年の断食月が終った頃で、私はもう7歳になっていた。父は私をオランダ人の子供たちだけが行く公立のオペンバレ・ラベル小学校に入れたがっていた。しかしそれはだめだった。私はマレー（インドネシア）人の子だったからである。私はアダビア小学校での成績もよく、オランダ語もすぐ自由にこなすことができるようになった。授業はマレー語で行われた。小学生のころから、私は次第にオランダに対して批判的になっていった。記憶に残っていることは、数学の時間にアブドゥラ先生が、学校で二番目にベスト・ドレッサーだった女の先生のことをあてこすって「バナナの皮をナイフでむき、バナナの身をナイフで小さく切って、それをフォークでつまみあげておちょぼ口へ運び入れる。私たちは指でバナナの皮をむきすぐに大きな口へほうりこむ。その方がよっぽど簡単だ」といったことがある。私たちはドーッと笑った。副校長のその女の先生（名前は忘れたが彼女はたしかに休憩時間にはいつもそうやってバナナを食べていた）への皮肉が理解できたからである。私たちはそのアブドゥラ先生が大好きだった。先生はまた

こうも言った。「われわれのチリー粉はバタとチーズよりずっとうまい。」私たちはその冗談のもつ深い意味を感じとりながら笑った（アブドゥラ先生は、1960年代初め、西スマトラ選出の国会議員になった）。

ときどき私は、オランダ語を習いながらさまざまなことに疑問を感じた。「背の高いオランダ人の紳士が大きな暑さよけの帽子をかぶって道を通るとき、どうして私たちは道端にしゃがんでおじぎをしなければならないのか。どうしてそんな光景の写真が読本にのせられなければならないのか。道を通るとき、ずっと向うからオランダ人が来るのが見えたら、どうして遠くから道をよけなければならないんだろう。どうして文法書に、わざわざ屈辱的な文章がのっているんだろう。」

私は、私たちの同胞が、なまけ者で、おろかで、不潔で、劣悪な民族だといわれているのを何度も耳にした。私は、オランダの歴史や、王家の名前や、16世紀から20世紀にかけてのオランダ国王の名前や、その治世などについて覚えるのに苦心惨憺した。私たち生徒は、そういうことを、少しの間違いもなく暗記しなくてはならなかったのである。

地理を習うときにも、いつも不満たらたらであった。壁にかけられた大きな地図は、オランダとかいう国がすごく大きな国であることを印象づけるように作成されていた。私たちは、小さな村や川や運河の名前まで、すべて暗記させられた。校長はムニール（ミスター）レイホルといった。私は身体が小さく、いつも最前列の席だったので余計感じたのだが、彼は怒りっぽく、しかも酒呑みで、すぐ生徒に平手打ちをくらわせた。彼はほとんど毎日、真赤な顔で、妙な臭いをさせながら教室に入ってきた。アルコールの臭いなどかいだことのなかった私は、それが彼の体臭だと思っていた。ときどきムニール・レイホルは、助手をしている奥さんと喧嘩をした。私の小学校生活の思い出は彼のおかげでさんざんなものだった。

父は裕福な商人であったため、オランダ人の銀行家や貿易商、商店主そのほか多くのオランダ人とつきあいがあった。そしてオランダ人の生活様式や合理的な考え方、社交性などに心からの敬意を抱いており、私をオランダに留学させて商業を学ばせたいと考えていた。これを私に告げたのは母で、父は、私がまだ母の胎内にいるうちから、ずっとそう考えていたのだった。オランダ留学から帰れば私は父の事業を引き継ぐであろうし、そうすれば両親は揃ってメッカに巡礼に行って、老後の幸福を祈ることができるというのだった。

そこで私は1918年、小学校2年になったとき、ホーヘンダム家に下宿させられて、オランダ語やオランダの生活習慣などを習うことになった。その謝金は1ヵ月75ギルダーであった。このことを父は非常に自慢していた。L. E. テルス社のホーヘンダム氏は父の親しい友人であった。私の方も知識欲に燃えていた。しかしそこに下宿して2ヵ月たっても、ホーヘンダム夫人は何も教えてくれなかった。読むようにと渡されたのは、シンデレラの物語だった。説明もなければ、読み方を直してくれたりその他の指導も何も与えられなかった。私のすることは、夕方7時から8時の食事時間まで、ただただ読書をすることだった。学校が1時にひけてから私のすることは、ただ食事をし、遊び、寝ることだけだった。それが私の毎

日だった。おいしかったのは朝食で、パン、バタ、ジャムまたはチーズ、それにミルクと卵が出た。昼はスープとビフテキ、じゃが芋、野菜、果物で、夕食も同じだった。私はいったい何を覚えてきたのだろうか。フォークとナイフとスプーンの使い方、それにヨーロッパの食物の味わい方だけだった。オランダ語の方はあまり進まなかった。

日常会話の授業は週に2度か3度で、しかもいつも10分足らずだった。私が我慢できなかったのは、毎日午後5時半にホーヘンダム氏が帰宅したときの夫人とのキスと抱擁、それに膝の上に抱くことだった。私はいつも見るのも恥ずかしくて、自分の部屋にかくれてしまった。いずれにせよ、その6ヵ月間は、小さな子供にとってはぜいたくで、単調な生活であった。

半年が過ぎたころホーヘンダム夫妻はオランダに帰ることになり、私はエンゲル氏の家にあずけられることになった。しかしここは3ヵ月でやめた。というのはエンゲル氏はとても食物にけちだったからである。私は夜お腹がすいてたまらなかった。父にそう言うと父は怒ってすぐ私を家へ連れ戻した。

1923年に、私は1年間予備科入学を許され、オランダ語の学習にはげむことになった。その学校は予備科を含めて四年制だった。学科目はオランダ語、英語（必修）、フランス語（選択）、数学、幾何、基礎物理、植物学、動物学、簿記、歴史および地理であった。マレー語（インドネシア語の前身）は2年の時、マレー人の先生シャイル氏から教わった。週に一度ハジ・アブドゥラ・アフマッド博士の宗教の講義があった。また昼の時間には、ドイツ語を学ぶ機会を与えられたので、私は2年間ドライザー先生からドイツ語を習った。私の成績はおおむね中位といったところで、小学校以来優等生であったことはなかった。私の1日の時間割はきっちり決まっていた。勉強は昼と夜、テニスをする時間、サッカー観戦の時間、昼食後の休憩時間など、きちんとまめであった。気候は暑かったし、私はいつも疲れていた。そうして4年間の中学生活はどうやらこうやら卒業した。校長はアムセン先生といい、きびしい先生であった。

この当時の仲間で独立後インドネシア政府の高官になった人たちとしては元首相で法律家の今は亡きシャフリル氏、これも元首相のナシール氏（法律家）、独立戦争期のジョグジャカルタの臨時政府で副大統領をつとめた法律家のアサート氏などがいるが、そのほかにも、駐オーストラリア大使だった法律家のタムジル氏、元駐伊大使の法律家ラスジッド氏、元貿易大臣や南スマトラ知事をつとめた故A. K. ガニ博士、元駐インド大使の故ススカ氏、元国防相ハリム博士など多士済々である。

両親の不仲

私は父との暮しを楽しんでいたがその幸せは長くは続かなかった。父が若く美しい女性を第三夫人として迎えたからである。父はこの結婚を秘密にしておきたかったが、どうしてそんなことが長く知られないでいるだろう。私の母は非常に怒って父を呪った。そして怒りに

まかせてパダンに行き父と対決しようとしたが、それは親類の者たちに止められた。父とばかりでなく、私の継母になるハリマと会ったら、どんなことになるか分からなかったからである。こうしたことは何回かあり、その度に母はまわりの者たちに止められた。母はとても激しい気性で気の強い人だった。そこで、父と会うことができないと分かると、母は、父には分からないようにこっそりと私を連れ出したのである。朝の10時ごろ、母は父の店のそばで私を待っていて、私が出て行くと手招きした。私はどんなにうれしかったろう。30メートルほどの距離を夢中で走って母に抱きついた。母は私をそのまま近くのパリンガム駅につれていき、汽車にのせた。パリアマンまでは約200キロ、3時間ほどの旅であった。

父は私が誘拐されようとは夢にも思わなかった。私がいないので使用人たちにたずね、その一人から私が母に連れられて駅の方へ行ったことを聞き出した「お前のお父さんなんか、コレラに罹って血をはいて死んでしまえばいい。アッラーの罰がくだるように。もうお父さんのところへ帰ってはいけないよ。もがきぬいて這いずりまわって死ねばいいんだ。また結婚するなんて…。」

私は黙っていた。母の真赤な怒り顔を見上げる気にもなれなかった。そして心の中で「僕はお母さんも好きだけれどお父さんも好きだ。僕を生んだのはお母さんだけど、お父さんは僕を食べさせてくれた。お母さんがいなければ世の中のことは分からないけど、お父さんは僕がいないできっと淋しがっているだろう」と悲しく考えていた。

それから約1週間後の昼ごろ、母方の伯父のマエティクピチェ氏が訪ねてきた。伯父は仲買人でよく父の家の近くに行くのだった。そして伯父は、ものやわらかい口調だったが母を叱って、「どうして子供をだまって連れ出すなんてことをするんだ。この子はお父さんと一緒にいて幸せだったし、何もかも世話してもらっている。学校へも行かせてもらえる。お前が年をとったとき、この子はどんなに役に立つかわからないよ。わたしは父親に頼まれてこの子を連れ戻しにきたんだ」といった。母は父が結婚したことは我慢できないと答えた。「私はこの子と一緒でとても幸せです。この子は私の子供です。父親なんかどうでもいい。新しい奥さんを迎えて大喜びなんだから…。」

母は私を手放したがらなかった。伯父はいろいろと言葉をつくして母を説得しようとした。「お前は、この子の父ができると同じように、この子を食べさせ、教育を受けさせてやれるかね。この子は、このまま村におけば、ただの村の男で終わってしまう。浜辺で漁師をするくらいが関の山だ。それでもいいのか」

伯父はそれから私の方をむいて「自分の服を持っておいで、さあ一緒に行くんだ」といった。

「ぼくの服はいま着ているこれだけです」と私は伯父にいい、涙を浮かべながら、悲しく母の方をむいて許しを求めようとしたが、言葉はのどにつかえて出てこなかった。母はいった。

「じゃあお行き、気をつけて…。」

私は母の両手に接吻して心から許しを求めた。私たち3人は、広い砂まじりの庭の中の、大きな木造の家に立ったままだった。伯父が突然姿を現してから、45分もたっていなかったろうか。3人のほかは誰もいなかった。この大きな木造家屋は、父が母のために建てたものだった。私と伯父は駅まで1キロ半ほどの道を黙って歩いていった。

私たちは1時間半毎のパダン行きの汽車に乗ってパリアマンを去った。母は見送りに来なかった。私の心は別れの悲しみで重く沈んでいた。私が生れるまで9ヵ月と9日耐えてくれた母、その母にもう会えないのではないだろうか。私は手も足も冷たくなっていた。父に顔を合わせるのが怖かったのだ。帰りついたのは夕方の6時ころだった。私は思い切って真直ぐに父の店へ入っていった。父から平手打ちか杖で打たれることを覚悟していた。父はおそろしい顔をして怒った顔で、

「なんでお母さんになんか会いにいったんだ」

と怒鳴った。私は低い声で

「お母さんがぼくを連れにきたんです」

と答えた。父はさらに

「お前のお母さんがお前を養えると思うか。お母さんの所にいれば、お前は砂しか食べられず、どんな人間にもなれないぞ、お前の母親は実に恩知らずだ。わしが大きな家を建ててやったのにあいつはわしを追い出した。わしがミルクをあてがってやったのに、あいつはわしに毒を盛ろうとする。お前の母親はそんな恩知らずの女なんだぞ。もう二度とついて行ったりするな。そんなことをすると、お前の足の骨を折ってやるからな。お前の母親がここの床でも踏めば、わしはそこの所をきれいさっぱり割りとってやる。お前の母親など片方の眼でさえ見たくもない。」

と言った。そして、いとこで店の使用人として働いているアドジョ・ナイラを呼んで、荒々しくどなりつけた。

「もしまたシ・ミナが店に来たりでもしたら、犬のように追い返すのだ。いいか。」

アドジョ・ナイラはおとなしく「はい、そういたします」と答えた。

私はどうして父が母をそんなに憎んだのか分からなかった。6つか7つの頃の私にとって、このような父の呪詛の言葉は、悲しく劇的な印象となって、深く心に刻みつけられた。私の目は涙でいっぱいだった。だが私はじっとこらえて涙を流さないように努力した。これが私の運命なのだろうか。どんな星のもとで生れたのだろう、それともアッラーの神の罰なのだろうか、と私は思った。私は両親に対してなまいきな口などきいたことはなかった。ただ一度母にむかって「お母さん、お父さんの所へ帰ってよ」となだめるつもりでいったことはある。それに対する母の答は「どうして。私はお前のお父さんが嫌いだよ」というものであった。父に対しても私は「お父さん、お母さんの所へ帰ってください」と頼んだ。それに対して父は「なぜだ。お前の母親はアラーに呪われた女だ。もう母親のことなど口にするな」と答えるのだった。私は心の底から父と母が仲直りし、楽しく平和に豊かに暮せる日が一日も

早く来るようにと祈ったのだった。

それは私が父のもとに帰ってから3週間後のことだった。そして今度は前のように簡単な方法ではなかった。私は甥にあたるアドジョタルから、母が叔父の店で待っている、という伝言を受け取った。私は父には黙ってすぐ叔父の家にかけつけた。そしてまた母と私はパリアマンに向けて10時発の汽車に乗ったのだった。叔父のマルズキと彼の妻は、大反対で私たちを止めようとしたが、母は彼らの忠告をまったく無視した。叔父は言った。

「あんたは3人も息子がいる。ムフタル（2歳年下）もアフマッド（5歳年下）もまもなく学校へあげてもらえるだろう。あんたは子供たちを学校にやれるのかい。」

母は何も答えなかった。しかしこの誘拐事件も7日で終りを告げた。また伯父のマエティクピチェがパリアマンに迎えにきた。母は今度は強情を張ることもなく、すなおに私を引き渡した。伯父は母にむかって、「そう感情的になるな、落ち着いてこの子の将来のことをよく考えてみるように」とさとした。母はただ「この子がいないと淋しくてたまらない」といっただけであった。私が母に、父のもとに帰る許しを求めたときも、母の口からは父に対する呪いのことばは出なかった。

パダンに帰りつくと父はいった

「お前はなんと強情なのだ。また母親のあとについていって。お母さんがお前のために何をしてくれるというんだ。お前を生んだだけじゃないか。もう絶対にお母さんに会うな。それがわしの命令だ。いいな。」

私はただただ悲しく何も言葉が出なかった。

3度目に母が私を連れだしたのはそれから1ヵ月後のことで、今度は3週間も父の所へ戻らなかった。

私は母が以前のように強気でなく、しょんぼりしてみえるのでそのわけをきくと、

「もう2ヵ月以上もお父さんは、毎月の手当25ギルダーを送ってくれないのだよ。もうお米もほとんどないし、市場で買物するお金さえ残りわずかなんだよ」

ということで、私はすっかり驚いてしまった。父はパダンでも指折りの裕福な商人だった。それなのに、どうして私たちを飢えさせるようなことをするのだろう。母は私にチュランとチェンパカの花を摘み、ジャンブーの実を採ってくるようにといいつけた。それを金持の祖父モハマッド・サレーの所有する市場で売ってほしいというのであった。

翌々朝、私は丸い竹篭の中に花束と果物を入れ、それを頭にのせて、半キロほど離れた市場へ売りに出かけた。そして黒っぽい砂地にしゃがんで、花や果物を買ってくれるお客を待った。母には、花束も果物もどちらも5セントづつで売るようにといわれていた。私は前を通る人に「香りのいい花とおいしい果物を買ってください。お願いします」と声をかけたが、黙って知らん顔で通りすぎる人が多く、中には3セントにまけろという者もあった。私は母に叱られると思って、そうはできなかった。2時間あまりも座っていただろうか。ようやく花束3つと果物一房を売るのに成功した。初日の成果は、そんなわけであまりよくな

かったが、もし、この市場のそばに店を持つ叔父のアパク・ミアリに見つかりさえしなければ、次の日からはもっと売れると希望は持てた。私が右ポケットに入れた売り上げ金を固く握りしめ、左手に40センチほどの直径の竹篭を抱いて家路についたのは、11時半頃だったろうか。持っていた花と果物の半分は売れ残ってしまった。それでも母は汗だらけで真黒な顔の私が20セントを差出すととても喜んで、これでお米と野菜が買えると言い、「さあ、台所へ行ってお昼をお食べ」といった。もちろん私は、2日まえの食物の炒め直しでも大喜びで食べた。それでもお米の一粒でも床にこぼさないように注意して食べた。こぼして、母に手ひどく太腿を打たれた1年前のことを思いだしたからである。残った花を私はベッドの上に撒き散らし、ジャンブーの実を食後にいくつか食べた。

市場の花と果物売りは1日おき、または2日おきに、しばらく続けられた。花と果物の状況次第での店開きであった。そして2週間あまり経ったある日、私は突然、叔父のアパク・ミアリに見つかってしまった。

「いったいここで何をしているんだ。なんというひどいことをしているんだ。お前はお父さんの顔に泥を塗っているんだぞ。お前のお父さんは大変な金持だ。お前はこんな真似をしろと誰にいいつかったんだ。」

と彼は怒って言った。私は身体がふるえだした。叔父の言うことはもっともだった。父は金持でパダンでもよく知られた人であった。私はしばらく口もきけなかったが、やっと勇気を出していった。

「ぼくはお母さんに頼まれたんです。もう家にはお米もなく、お父さんからお金も送ってこないんです。こうして花と果物を売って、そのお金でお米を買うんです。」

アパク・ミアリは黙っていた。私は織物商で金持の叔父が私に1ギルダーか少なくとも50セントでもくれるだろうと期待したが、彼は何もくれなかった。私が帰って母にその話をすると、母は叔父の言うことなどきくなといった。

私は母のための商売を忠実につづけて母を助けた。父は金持だったが、母は貧しかった。それで私は母のために、裏庭に育った果物や花を売りに市場に座ることを、少しも恥だとは思わなかった。私は母に対して義務をつくしているのだと考えていた。

私の母のこうしたやり方は父を苛だたせ、精神的な苦痛を与えるとともに、人びとの面前で父を辱めるものであった。それが母の父に対する報復だったのである。そしてまた、伯父マエティックピチェが私を連れ戻しにやってきた。伯父は母にむかって、私がもう学校に行くべき時がきたといった。母は何も文句をいわずに私を引き渡した。私は母の手に接吻し、涙ながらに「ごめんなさい」といった。母は私の頭をそっと撫ぜながらやさしく「かしこい子におなり」といった。

私はこのころ父をもう恐れてはいなかった。私は帰るとすぐ父の手をとって接吻し、許しを求めた。父はいった。

「こんなに長く母親のところにいられて満足しただろう。お前のお母さんが何の役に立つ、

お前の顔を見てみろ、フライパンの底のように真黒じゃないか。もうお前は学校に行かなくちゃならん。」

私は何も答えずに、そのまま継母の所へ挨拶に行った。彼女もとても悲しがっていた。継母はやさしい物言いをする人で、私を深く愛してくれていた。私の食べるもの、着るもの、寝床など、すべて彼女が面倒をみてくれ、私が高い階段から転び落ちたりしないように、いつも気を使ってくれていた。彼女の実の娘ロハニと私とのあいだに、何のわけへだてもしなかった。私の母に対しても恨みがましい感情など少しも持たず、自分に対する母の悪口をきいてもまったく意に介さなかった。母とは違う、非常に寛容な心の人だったのである。

以前に母から聞いたところによると、私に対する父の愛情は私が生れる前から育っていたものであった。私には姉と兄が一人づついたのだが、姉のカマリアブは3歳のときに天然痘を患って死んでしまい、兄も6ヵ月のとき下痢がもとで死んでしまった。父は男の子を欲しがった。そしてもし男の子が生れたならば、パダンにインド・サロンを売りにきていた、裕福ですこぶる親切なイスラーム教徒のインド商人の名前をとってつけるといっていたそうである。父とそのインド人とはきわめて親しい仲であった。「もし男の子が生れたら、あのイスラーム教徒の商人の名前をとって、モハマッド・ガウスとつけよう。アッラーの神がわれわれの望みをかなえてくださるよう祈ろう」と父は言って、母も私が胎内で4ヵ月になって以来、祈りを捧げるたびに、どうか男の子をお授けください、と祈っていたという。父母の祈りは叶えられ、私は1910年3月21日（月曜日）のよく晴れた朝11時30分にパリアマンで産声をあげたのだった。そして私は父が希望したように、イスラームの名前ではなく、インド風のガウスという名前をつけられた。

私の両親の不和は2年以上もつづいた。その頂点は、夜の8時ころ店を訪れた母の頬に、父が平手打ちを喰わせたときであった。私はそのことを、翌朝、使用人たちから聞かされた。それから1月ほどして、父は母を離別したのだった。それは1922年のことで、12歳の私にとっては何よりも大きな悲劇であった。

父はイスラームの結婚と離婚に関する法律による“タラク・ティガ”を母に与えたのだった。タラクとは離縁、ティガは三の意である。これは決定的な離縁であり、和解は全然考えられないもので、マレー人の象徴的な言い方に従えば“二度と結ばれることのない離別”である。もしこの離縁が“タラク・サトゥ”であったならば、サトゥは一の意で、私はもう一度両親のもとで、愛情にはぐくまれた幸福な生活を送るチャンスがありえたかもしれない（タラク・ドゥアは言葉として以外、実際にはほとんどない）。親類縁者たちが、両親を仲直りさせようと努力してもむだであった。私の“愛する母の首は3度鋭い布で打たれ”、私の運命は定められた。

学外での課外活動

私は小学校に入って7歳のとき、パダン少年団の一員になった。私はカーキ色の半袖シャツを着、長ズボンをはき、帽子をかぶり、祖国の象徴である赤と白のネクタイをつけて大得意だった。毎週1度、同い年の少年が10人から12人くらい、朝8時にアダビア小学校校庭の前に集っての訓練があり、私たちは20キロほどの道のりを、通りから通りへと、あごを上げ胸を張って行進した。そしてこの訓練によって私たちは愛国心、団結心と、大義のための自己犠牲の精神を叩きこまれた。訓練はきびしく、私たちは何よりも訓練やきまりを守り、指導者に対しては従順であることを要求された。私たちは、自分たちが祖国のための少年兵になったように感じた。私たちのリーダーは、中学校2年生のクルシウス君だった。

ボーイ・スカウトの訓練は、私の精神的、知的、肉体的および道徳的発達にとってきわめて大きく貢献した。私はオランダ人に対してますます批判的になった。私は真実が知りたかった。ふつう断食の月にはバタビア（現 ジャカルタ）で勉強している学生たちもそれぞれ家へ帰る。故郷へ帰った学生たちは、スマトラ青年同盟の旗のもとに集会を開いたり、討論や意見交換会をしたり、演説会をしたりする。そういう演説のほとんどが、インドネシアの歴史や文化、あるいは、この国の統一を乱し資源を搾取するオランダの政策などに関するものであった。

私たちは、学校でオランダ人教師から反逆者として教えられたジャワのディポネゴロ王子、スマトラ中部のイマン・ボンジョル、あるいは北スマトラのトゥンク・ウマールといった人物が、実は反逆者などではなく、オランダの植民地支配に反抗して立ち上がった勇士だということを知った。彼らは国民的英雄であり愛国者であったのだ。私はオランダが、実はスマトラ南端のランポンやマレー半島のジョホール州ほどの大きさしかない、小さい国だと知って驚いてしまった。教室の壁につけられた地図からの印象では、オランダはスマトラよりずっと大きく思われたのだ。パダンとバタビアで学校に通っているあいだ中、私は正規の大きさの地図を見ることがなかった。私たちは学校では中部ジャワのボロブドゥル寺院、プランバナン寺院その他多くの遺跡は、私たちの国の文化の優秀性を示していることなど、教えられもしなかった。私は、オランダという国は世界の中でも高度に発達した文明国だと思っていた。議論の題材としてとりあげられた中には、オランダ政府の教育方針によって私たちに押しつけられている劣等感の問題があった。つまり私たちは、あらゆる点においてオランダ人という主人に劣る民族だと教えられてきたことである。演説者の一人は、民族的団結の重要性、祖国に対する国家意識と愛国的、犠牲的精神などを強調した。私たち少年たちのスローガンは「団結は力を産み、分裂は失敗に通ず」というのであった。そのとき演説をした者たちの中には、ヤミン、A. K. ガニ、タムジル、アバス、ハザイリン、シャルン・シャンなどの民族主義者がいた。スマトラ青年同盟は、1923年ごろ精神的指導者のアミル博士とバダ・ジョハンによって結成されたのである。そしてそれは、ミナンカバウ中の青年すべてから、圧倒的支持を受けた。

1924年の半ば、オランダ政府の下での国民参議会（フォルクスラート）の有力な一員であったH. M. タムリン氏が、イスラム同盟党のハジ・アグス・サリム氏、および後のインドネシア国民党幹部の法律家サルトノ氏を伴ってパダンを訪れた。その目的は、オランダの植民地統治について国民を啓蒙し、統一国民戦線を組織することにあった。

300年間にわたる圧迫の歴史が私の眼前に展開された。豊かな資源に富むこの群島はしぼりとられた。オランダ人はインドネシアの天然資源を安価で本国に持ち帰り、代わりにさまざまな物資を高価に売りつけた。オランダはますます栄え、私たちはますます貧しくなっていった。彼らは労働者の膏血をしぼりとった。いまやこうした状態は、徹底的に変化させるべきである。人間はアッラーのもとに平等に生まれ、この太陽の下で生きる平等の権利をもっているのだ。私たちは“手足をしばられ舌を切られた”状態であり、“黄金の鳥籠”に入れられた鳥のように、自由の一かけらもなかった。植民地の教育制度も、とうてい正当化されうるものではなかった。ほんの一にぎりの政府の役人の子弟たちのために一般大衆の子供たちの教育は捨ててかえりみられなかった。学校に入れるのは政府の役人の子とか、地域の高官の子とかだけだった。

演説者たちはパダンの住民たちにむかって“団結せよ”と呼びかけた。「われわれの現状を改善する道は、天から与えられるものではない。アッラーの贈物としてもこない。われわれが闘いとるべきものだ」とハジ・アグス・サリム氏は力説した。「われわれは、自分自らものごとを処理しうる能力をもっている。ただ、その機会を与えられていないだけなのだ。われわれはオランダ人に劣る民族ではない。オランダ人がこの国にやってくるのは、慈悲をたれるためではないのだ」とタムリン氏も叫んだ。「このインスリンデ群島（インドネシアという言葉はまだ政治的な実体をもっていなかった）の諸民族が、すべて強固に結束すれば、この地球上にわれわれを抑圧しうる者はない。祖国を自由にするのはわれわれに与えられた使命である。かつてジャワにはマジャパヒト帝国が存在し、スマトラのパレンバンにはスリヴィジャヤ帝国が栄えた。群島のすべての諸民族が団結して初めて、わが国はオランダの支配から自由になりうるのだ」とサルトノ氏も強調した。

演説会は拍手また拍手、そして笑い声が渦まいた。しかし集会が急にシーンと静まりかえる時もあった。情報部員が「弁士中止！」と叫んで、演説の途中で黙らせるからである。それは演説妨害である。弁士は役人に食ってかかって中止命令を取り消させ、また演説をつづけたが、こういうことが3回か4回かあった。まだ年少だった私はとてもおどろいて、どう考えてよいか分からなかった。演説が人びとに革命を煽動していたのだろうか。私は父と一緒だった。まわりの聴衆は大部分が商人など中産階級で、政府の役人は見当たらなかった。そして会場は警察や情報部の連中で取り囲まれていた。見渡したところ、学校へ行っている年頃の子供は私ひとりだった。このポンドック映画館での演説会は、午前9時に始まり、終ったのはお昼ごろであった。

父はいつも商人にかけられる営業税の高額なことをこぼしていた。私はある日、父が

「なんといっても税金が高すぎる。家具に税金がつけられるばかりでない、カーテンにさえ税金がかかるのだ。オランダが戦争をして負ければ、その費用はわれわれに回されてくる。言語道断、不公平きわまりない。オランダ人はわれわれにとって吸血鬼だ。残るのは骨と皮ばかりだ」といっているのを耳にした。

私の家から半キロほど離れたウジュン村のジャワ・ダラムというところに、私より2歳年上で17歳のオランダ少年がいた。彼は背が高く、肉付きもよくがっしりした強そうな少年だった。どういうわけか知らないが、彼はいつも、学校への行き帰りや、市場へ行く途中などに私と道で出あうと、きまってひじで私をこづくのだった。私は少くとも一週間に一度はそれをやられ、それが何ヵ月も続いたので、しまいには彼に出あうのが怖くてたまらなくなった。私は背も低く、痩せていて弱かった。もし喧嘩すればこてんこてんにやられてしまうだろう。私は子供のころ、母にバナナ入りの粥で育てられた。それには栄養分などあまりない。それにひきかえ、オランダ少年の食べ物はカロリーも高かった。彼はパン、バター、チーズなどで育ったし、いつも牛乳を飲んでいたのに、私の飲み物は井戸水だった。どうして彼に勝てよう。だがいつまでもこんなに痛めつけられてはかなわない。

何とか闘う方法を考えださなければ…私の心の中で、オランダ人に対する怨みの念はすでに十分育っていた。

ある晴れた日の朝10時半頃、ジャワ・ダラムの市場から帰ってくる途中で、私は遠くからこの少年が私と同じ道の側をやってくるのを見つけた。2人の間の距離はだんだん縮まった。彼はもちろん、私がいつものように小さくなって道を譲ることを期待している。しかし私は、彼の顔に右手のげんこつを喰わせてやろうと決心していた。足で蹴るよりげんこつがいい。3メートルほどに近づいたとき、私はゆっくりと道の左側に身をよせ、げんこつが必ず命中、というポジションをえらんだ。私の小さな手は、彼の顔の真中という狙いをはずれ右目を打った。彼は頭を垂れ、右手で目をこすった。私は一目散に逃げた。彼が追いかけはじめたとき、私はもう30メートルも先にいた。彼は追うのはあきらめて私をめがけて石を投げたが当らなかった。私はくたくたになり、汗びっしょりになって家に帰った。そのとき父は店にいた。しかし次には何が起こるだろう。私はオランダ少年の仕返しを恐れた。だがあのげんこつ以降、私はあの少年を見なかった。バナナ粥と井戸水がチーズと牛乳に勝ったのだ。私は植民地支配に対する“ひそかな反逆者”の一人となったのである。

日本人との接触

私の家の隣りには日本人の一家が住んでいた。近藤［鶴吉、福井県出身］という人で、奥さんと「ボイちゃん」と呼ばれていた男の子と、長崎から来たというお手伝い、それにこちらへきて雇った庭師がいた。近藤氏は東海洋行の店主だった。ボイちゃんは8つくらいで、私はよく近藤氏の家へ行きボイちゃんと遊んだものだ。ボイちゃんの本当の名前が何だったかは知らない。ある日曜日の午前11時頃、ボイちゃんと遊んでいた私は、家へ上って一緒

にお茶をお上がりなさい、と奥さんに声をかけられた。奥の方の部屋に招かれ、座ぶとんに座った。たたみはなかった。近藤夫人は日本茶におせんべいと和菓子の甘いものをだしてくれた。それらは私にとって、生まれて初めての珍味だった。近藤夫人はまた、富士山、梅、祭り、それに美しい着物を着た美しい少女たちの写真も見せてくれた。私はとてもひきつけられた。「きれいでしょ」と近藤夫人がいうのに私は「きれい」とマレー語で答えた。家へ帰ろうとすると近藤夫人は、「弟さんや妹さんたちにおあげなさい」といって真白な紙にいろいろなお菓子を包んでくれた。それからのち近藤夫人は何度も私を招いてくれた。私は臆面もなくそのたびにご馳走になった。とくに私が強く印象づけられたのは、近藤夫人のやさしさであった。私はホーヘンダム夫人やエンゲル夫人から、あんなに丁寧に扱われたとは一度もなかった。

近藤氏と私の父は親しい間柄で、よく冗談をいいあっては笑っていた。ある朝、私は近藤氏が冗談まじりに父にいっているのを耳にした。「息子さんを日本の学校におやりになったらいいですよ。勉強にはよい国です」。父は何も言わずにただにこにこして聞いていた。それは家の前の路上での立ち話だった。また別のときにも、近藤氏の家に行ったとき、近藤氏はふたたび父にそれを勧めた。新居の入口に立っていた夫人もそれに賛成した。この時も父は微笑んで「あの子はまだ小さいので、そのうち考えてみましょう」と言っただけだった。その会話はマレー語だったので、父のすぐ傍に立っていた私ははっきりと耳にとどめた。その時私は小学校4年生だった。この1920年は、私が初めて日本茶を味わい、富士山や桜の写真を見、近藤夫妻の勧めを耳にした年として忘れがたい。

近藤家の前にはパダン「原住民」テニス・クラブがあった。これは1923年ごろ金持のダウド・カリスタン氏がつくったものである。オランダ人たちはスンガイ・ボンに観覧席つきの4面のテニス・コートを持っており、そこから100メートルほどの所には、中国人のテニス・コートもあった。このぜいたくで貴族的なゲームは、西スマトラではオランダ人が始めたもので、凧あげ、闘鶏、マーブル、サッカーと並んで、子供の頃から私のお気に入りのスポーツであり、小さいときは木のラケットを使い、少し大きくなってから本物のラケットを買ってもらった。始めたころ私はまだ14歳で、正式に仲間入りできなかったので、もっぱら球拾いだったが、球を拾いながら私はボールの打ち方を観察した。球拾い仲間のサムスディンとボヤとは、いつも大人たちが家に帰ってから練習をするのだった。そしてやっと正式に仲間入りを許されると、私は6ヵ月のうちに長足の進歩をした。

私たちがよく一緒にテニスをしたのは近藤氏のグループの人びとで、近藤氏の部下の荒井氏、宇都宮氏、それにパサール・バティプの父の店から3軒目にあった、日本製の布地を扱う明治商会の店主野村氏などであった。野村氏は父の友人でもあった。近藤氏のグループは中々上手で、よく日曜日の午前11時、ほかの人びとが暑くて出てこられないときなどにコートに出てきていた。近藤氏は打ち込みが好きだったが、外れることが多かった。荒井氏は落着いてラインすれすれに球を打った。バックハンドでの打ち込みは見事だったがフォアハン

ドは弱かった。宇都宮氏はフォアハンドもバックハンドもすこぶる慎重で、打ち込みはほとんどせず、打ち返し専門だった。彼は特にフォアハンドが弱かった。野村氏は球をひねったり曲球が得意だった。背が低くて太っていたのであまり走らなかったが、よく笑う人だった。近藤氏は背が高く、やせていて、活発に動いた。私のフォアハンドはよく計算してあってよかったが、バックはだめだった。そして背が低かったので、宇都宮氏と同じように曲球が好きだった。しかし私は、相手の球をとるのにすばやく走ることができた。ダブルスでもシングルでも、みんな私と試合をしたがった。そして私はますます、近藤氏のグループばかりでなく、テニスを通じて上流社会の人びと—ハキム博士、弁護士のアラー・タヘール、ジャミン、クスマトアジャの諸氏、建築家のサマド氏、法廷儀典係のフセイン氏、造幣局のサビリン氏、詩人のユスフ氏、教師のラッシド、カタブ、アバス、アジズ諸氏、それに裕福な商人のシャリフ・ガニ氏、サレー・イスマイル氏、郵便局勤務のラジャブ、ハルン、リバイ諸氏など—と親しくなったし、学校友達のハルン・アルラジッドは、のちにパダンの裁判長になったが、彼やそのほか大勢の人びととも親しい友達となることができた。私たちは、女性のプレーヤーたちの間でも人気があった。彼女たちは学校の教師が多く、ヌラニ、ロスダ、バダリア、ヌルナハール、ズルカニ、サイリその他の諸先生がいた。

テニスに熱中

私たちはどきどき中国人クラブとも親善試合をしたが、中国人はタフで慎重に球を打った。私たちはほどほどくらいの実力だった。最初のシングルス試合のとき、コートも、あたりの様子もちがうので、私はすっかりあがってしまった。あがると調子が出なくなるぞ、と先輩たちからよく聞かされていたのだがまったくそうだった。このときの試合は、私たちの側のラシッド、サレー、アキスが敗け、私もグワン氏と試合して、3対6、4対6で敗北を喫した。しかしこのときから私は、ゴ・スン・ヒン、ゴ・スン・テック、ゴ・スン・ホーなど、また中国人の中でも一番金持の実業家であるゴ・グアン・テー氏の一家の人びとと仲よくなった。ゴ氏のビルは明治商会の真向かいにあった。

毎年復活祭のころには、オランダ人テニスクラブが主催するテニス試合がパダンで行われた。オランダ人との最初の試合に、私は学校教師のスルカニ先生と組んで混合ダブルスに出たが、ベルハミン組に苦もなく負かされてしまった。私達の側からは他に誰も出るものがなく、近藤氏のグループも誰も出さず、中国人もあえて試合を挑もうとはしなかった。それでも私は、シングルに出て、ブルインコープ氏を相手に奮戦したが、彼は猛烈なスピードで私を1対6、2対6で大敗させた。それは1925年のことだったが、私にはよい刺激となり、これからもっとスタミナをつけて正確に打つことを学ぼうと決意させた。

1926年の復活祭の試合で、ダブルスの私のパートナーはラシッド氏だった。仲間たちはみな私を激励してくれた。みなオランダ人に反感を持っていたからである。オランダ人はきわめて横暴だった。私は、といえば、私は自分のクラブの名をあげたかった。私の気がかり

はあがってしまうこと、自信喪失、それに身体の小さいことだった。その頃私はたまたま父からサナトゲンを飲むようにといわれた。この薬を父は、鎮静剤として長年用いていたのである。それで試合の2時間前、私は処方通りにそれを飲んだ。はたして私は非常に落ち着いていられ、球を追っても気が散らず、私の球は力強く、戦略もたしかで、相手をどきまぎさせた。こうして最初の勝利は私たちの上に輝き、2試合目も勝ちゲームとなった。ダブルスの最初の試合の相手は、オランダ人のダブルスのチャンピオンであるクロック＝ベルハミン組であった。それは晴天の日曜日のことで、フェンスの外側には見物人で沢山の人だかりだった。テニス仲間たち、商人たち、通行人、学生生徒たちなど。私たち現地の住民をオランダ人は「原住民」と呼んだ。観覧席はオランダ紳士たちやその他の白人たちで満員だった。試合は午前9時半から始まった。涼しくて気持ちよい朝だった。第1セットは35分くらい、2対6で完敗だった。2セット目も5対1で、相手側が勝ち進み、しかもマッチポイントとなった。私は後衛でラスジッド氏が前衛だった。私はただ失敗をしないように、正確に打ち返すことに専念した。そしてどうやら1点をとって5対2となった。フェンスから拍手がおこった。私たちはまた1点をとり5対3になった。それから5対4、ついに5対5となった。フェンスの外からは拍手かっさいの渦、観覧席からもパチパチと拍手がきこえた。オランダ人との混血児からだったかもしれない。ついに第2セットは5対7で私たちの勝ちと決まった。信じがたいことだった。フェンスの外の見物人たちの拍手かっさいはいつやむともしれなかった。ここで30分の休憩となった。私は疲労を感じた。私は観覧席の階段の所の壁によりかかってタオルで汗をふいた。ラシッド氏は床に仰向けになっていた。

15分後にハキム博士がきて、試合を再開するようにといった。オランダ人たちは試合再開をのばして正午にしたがっていた。それはトリックで、彼らは暑熱に弱いので、延ばせば有利になるのは明らかだった。私はハキム博士に同意して試合を続けることにし、11時15分からゲームを再開した。暑さは相手側ばかりでなく、私たちにとってもつらかった。しかしとにかく私たちは慎重に落ち着いて試合を運び、球は右に左に、ネットすれすれに、ラインぎわにと打ちまくった。クロック氏は、ラインまで駆けつけようとはせず、見送ったまますますこともたびたびだった。彼の顔は真赤で顔から汗がしたたり落ち、シャツは汗でびっしょりとなっていた。彼は太っていて脚気病みのような歩き方をした。背が高いベルガミン氏も、私がゆるく高く打つ球を打とうとすることもできなかった。彼もまた疲れきっており、ネット際なので、ラインの所まで走ろうとすらしなかった。彼もまた、背骨がまひした病人のような歩き方をした。

暑熱はきびしくなるばかり、私は日除け帽すらかぶっていなかった。私はコートの真中に高くゆるい球を打ち込んだ。それをとろうとしてかけよった相手方の2人は、ラケットをぶつけあった。フェンスの外側からはどっと笑い声がおこった。スコアは1対0、5対1、6対1。フェンスの外と観覧席と、観客の反応はまったく対照的であった。フェンスの外からは絶え間ない激励と賞賛！　リバイ氏の麦藁帽子は太鼓のように打ちならされるし、パダン帽

子は空中高くほうり投げられた。私の父は、みんなにおめでとうといわれて、大満足でにこにこしていた。私はみんなの肩車にのせられ、笑い通しの仲間たちに叩かれたり、握手ぜめにあったりしていた。高慢なオランダ人を、小さな中学生が負かしたのだから、彼らがどんなに意気高揚していたかはいうまでもない。私たちは観覧席の前まで進んで賞杯を受けた。それは15センチほどの銀製のラケットで、木の台の上にとりつけられていた。おめでとうの声と拍手が起こったが、冷淡だった。観覧客はほとんどみながっかりした顔をしていた。暑熱の中で、太陽に照らされながら、2時間もプレイをしたというのに、主催者側からはコップ一杯の水すら差し出されなかった。チャンピオンから球拾いまで、すべての群集が散ったのは午後1時ころであった。

次の朝、学校へ行くと、数学のズウェーンス先生がにこにこして、オランダ語の日刊紙『スマトラ・ボーデ』に昨日の試合のことが出ていて、私の勝利をたたえ、そのプレイぶりが元気よくしかも巧みだった、とほめてあると教えてくれた。それには「二人の元気よいミナンカバウがチャンピオンとなるのは当然だった」と書いてあったそうである。私はほめられてはずかしくなり、ただ頭をさげただけだったが、この勝利はミナンカバウ人がオランダに勝つという、私たちにとっては象徴的な勝利だった。私の名前はみんなの口にのぼり、“テニスのチャンピオン”ともてはやされた。私はそのときまだ16歳で、相手のクロック氏とベルハミン氏は50歳を迎えたベテランだった。「オランダ帝国はいつかインドネシアに負かされるのだろうか」というささやきが広まった。これは1926年パダンにおけるできごとで、16歳の私にとっては最初の栄光のときであった。

日本人居住地の記憶

私の最初の日本人の友達は“ボイちゃん”で、2番目は父がポンドックのトコ東洋で75ギルダーで買ってくれた日本製の自転車だった。そのトコ、つまり商店で、私はその時、絹のシャツとネクタイも買ってもらった。私は小学校へもその自転車に乗って行った。子供用の自転車など見たこともなかった級友や先生たちが、なんとほめてくれたことだったろう。午後にひまがあると、私は毎日1時間も自転車を乗りまわしたが、みんな珍しがって私を見つめていた。断食月の休日に、私はその親友をパリアマンに連れて行った。ここでも人びとは皆寄ってきて、いくらで買ったのか、どこで売っているのか、商標は何か、とかいろいろ聞いた。こうして私は“アナ・マス”（黄金の子）というあだ名をつけられた。私は毎日、午前中も昼どきも自転車を乗りまわしていた。ところがある朝、スピードを出して前を行く牛車を追い越そうとしたところ、突然むこうから馬車が走ってきた。私はとっさにその馬車をよけて衝突の危機はまぬがれたが、そのショックで胸がドキドキした。父はいつも私が出かけるとき、気をつけて、スピードは出すな、というのが常だったが、それまで私は父の注意などに耳を貸さなかったのである。

当時トコ東洋はパダンで一番大きいデパートで、家庭用具、園芸器具、衣料品、陶器、ガ

ラス器、自転車、布地類、スリッパなどあらゆるものを売っていた。3人の中年の店員も、接客態度がとてもていねいだった。

家にいるときの私はよく、この自転車や、ねじを巻いて動かすおもちゃの自転車などで遊んでいた。とても楽しかった。そして木の枝でできたラケットを使い、ゴムボールでテニスのまねごともした。きれいな色の紙製のボールを蹴る遊びもした。口で吹くと蛇の形にのびる笛や、手にもって風に向けるとスースーという音をたてて廻る紙の風車もあった。このようにさまざまな楽しいおもちゃや、家の形をしたビスケットや甘いものを、私はいつもカンポンジャワの交差点にある、小さな日本人の店で買ってくるのだった。この店にはべつに名前がなかった。その左隣にあるもう一軒の店は、陶器やガラス器、台所用品や文房具などを主に売っていて、私に小さい頃から日本製品に対する馴染みを植えつけた。右隣は母方の叔父ハジ・アミンの時計店だった。人びとは、値段が安いので好んで日本人の店からものを買ったが、持ちはよくなかった。一番人気のある商品は仁丹で、歯痛も仁丹で治ると信じられていた。

日本人の歯科医は、私の知っているかぎり、パダンに2軒あった。1軒はイリゴ地区にあり、もう1軒はスンガイ・ボン地区の山本［吉蔵、鹿児島県出身］先生だった。山本先生はもうかなりの年輩で、この地方のオランダ当局によって、日本人居留者たちの指導者に任命されていた。私が日本へ発つとき、父に連れられてお別れのために山本先生の家を訪れると、夫妻は喜んでにこにこと握手しながらいった。「君が日本へ行くときいてとても喜んでいる。一生懸命勉強しなさいよ。君の成功を祈っている。なにか困ったことがあったら知らせなさい。」父も私も心から感謝を述べた。山本先生はおそらく50歳を越していただろう。この町には中国人歯科医も多かったが、人びとは好んで日本人の歯科医のところへ行った。「歯が痛くなったら日本人の歯医者のところへ行くんだね。痛まないようにやってくれる」と人が話しているのを聞いたこともある。

1923年、私の小学校の送別会は夕方に開かれたが、先生方は皆出席してくれた。その時の写真や、テニスのラケットと優勝トロフィを手にした写真などは、イリゴの日光写真館がとってくれた。送別会の写真は、ところどころに穴があいたようになっているが、今でも私の診療所の壁にかかっており、テニス試合のは自分の部屋にある。どちらも57年まえの写真だが、少しも色があせていない。日本人の写真技術は当時も有名だった。日光写真館の前には、ヒーレン理髪店があった。男性専門のこの床屋はオランダ人専用であった。土地の有力者たちも、ヒーレン理髪店へ行きたいなどとは思わなかったので、この店の顧客はオランダ人と混血人に限られていた。

カンポン・スベラには日本人の洗濯屋もあって、サービスも中々だった。広い敷地内にはたくさんの柱に紐が張りめぐらされて、真白な洗濯物が干されているのをよく見たものだった。

タピ・バンダロロの町の付近には日本人の大工がいて、何軒も家を建てていたが、人びと

はその手際良さに感心していた。その同じ通りに、ファティア（通称ティア）という名のミナンカバウ人女性と結婚した日本人がいて、子供が3人あり、一番下は8ヵ月、次はネーチャンと呼ばれる2歳の子、一番上がキンチャンと呼ばれる4歳の子だった。そこから2軒隣りの家に住んでいた私の義妹のロハニは、よくキンチャンと遊んでいた。その家は小さな卸屋で、菓子類、おもちゃ、紙製ボールなどを扱っていた。その日本人の名は忘れたが、彼はいつも着物で忙しそうに働いていた。ファティアは日本人の女の人のように髪を結い、ときどき手助けをしていたが、2人とも仲がよく、幸せそうだった。その男は30代半ばで、ファイティアは24歳とは、若くして結婚したものである。これは義妹のロハニから聞いた。

駄菓子の行商人が学校の門の前や、混雑した衛所に立っているときは、いつも学校の子供たちに取り囲まれていた。彼の売るお菓子、おもちゃやビスケットは、子供たちの大のお気に入りであった。その男は50年輩だったが、小さいお客相手にしんぼう強い応対ぶりだった。私は電気あめ〔綿菓子〕が作られるのを見るのが大好きだった。子供たちは列を作って順番を待ったが、待っている間でも作るのを見られるので面白かった。綿菓子は1個5セントだった。私の一番の好物はぐるっと巻いた“恋文ビスケット”だったが、渦巻状に長くて固い色つきの棒あめも好きだった。そしてよく買う子は、日本の海軍か陸軍かの、小さな旗をもらうのだったが、私は残念ながら一度ももらえなかった。この駄菓子屋はいつも1日か2日おきに、きちんと決った時間に、決った場所に、手押車をひいてやってきた。パリアマンの人びとは彼の勤勉さに感心していた。行商人というものは人びとの尊敬のまとだったのである。

パダンには子供を含めて約200人の日本人がいた。彼らはオランダ人社会とはつきあわなかった。私はある日、近藤家で働くミナの奥さんが「ホランダ・バニャック・ソンボン」（オランダ人はとてもごうまんだ）というのを聞いたことがある。日本人居住者とその地域の人びとの関係はねんごろで、その間にへだたりはなかった。日本人はパダンを自分たちの町と思っていて、オランダ人の態度とはまったく違っていた。オランダ人たちは自分が“主人”（ムニール）のようにふるまっていた。日本人居留者の社会は、中国人やインド人たちのそれと比べると、ずっと歴史が浅かった。

シマリン・クンダンの民話

ここで、ミナンカバウ社会で広く知られる一つの民話を紹介しておこう。少年時代、私も何度も聞かされた物語りである。昔、ムアラに年老いた女が一人息子のシマリン・クンダンと一緒に住んでいた。シマリン・クンダンは小さいときから浜辺で遊ぶのが大好きだったが、大人になると船で荷物を運ぶ商人のところで働くようになった。彼はいつも、主人のように金持になりたいと思いながら船での旅をつづけていた。その願いがかなって彼は船主になり、その船はいつも積荷でいっぱいだった。彼は村人たちからも金持として尊敬されるようになった。ある時、彼は積荷を満載して故郷へ戻ってきた。彼の母はいつものように、浜

に出て彼を迎えた。そしてシマリン・クンダンが船をおりると、母は喜んで進み寄った。ところがシマリン・クンダンは、それが誰だか分からないふりをした。母は、「家へ帰っておくれ。お前の好きなご馳走も用意してあるよ」といったが、シマリン・クンダンはそれを無視して、「お前なんかおれの母さんじゃない。おれには母さんなどいないんだ」といった。

「息子よ。私はお前の実のお母さんだよ。お前が小さいときから育てあげたお母さんだよ」と母親はくりかえしたが、シマリン・クンダンは「おれには母親なんかいないんだ」と言い、怒りにまかせて彼女を突きとばした。年老いた母はその場に倒れながらもなお「息子よ、わたしはお前のお母さんだよ」と訴えた。

シマリン・クンダンはそれを尻目に、乗組員に出航の用意を命じて港を出て行った。母は悲しみの涙でそれをじっと見つめていたが、やがてそれが怒りにかわると、そこへ膝まづいて両手をあげて祈った。「アッラーの神よ、どうかシマリン・クンダンと彼の船を石に変えて下さい！」

それから数時間後、稲妻と雷をともなった怖ろしい暴風雨がおこって船は吹きとばされ、ムアラから25キロほど離れたアイルマニス〔甘い水の意〕の海岸の岩にぶつかって石になった。シマリン・クンダンも同じ運命を辿ったという。

私は遠足でアイルマニスに行ったとき、それらの岩をみた。村人たちがいうには、ときどき夜になるとその運命の午後におこったのと同じような、荒れ狂う波が岩にぶつかる音が聞こえ、シマリン・クンダンがすすり泣きながら母親の許しを乞うている声がきこえるという。

貴族的な愉しみ競馬

父は競馬が好きで、よくパダン・バンジャン、ブキティンギ、パヤクンブなどの競馬に出かけたが、私もよく父についていったものだった。父の馬はクダ・パトイすなわち稲妻という名で、競馬の1週間か10日前には汽車で競馬場へ送られるのだった。私はいつも観客席の最前列に陣どった。そして父の馬が優勝するようにと念じながら手をたたいたり、わめいたり、席から跳び上ったりした。はじめのうちクダ・パトイはいつも3等にも入らなかったが、調教を重ねるごとにだんだん成績が上ってきた。6ヵ月もたたないうちに他の馬主たちの羨望の的となり、次の競馬はパトイがらくらく優勝すると見られるようになった。パトイはダトゥ・マルフムの厩舎につながれていたが、何ということだろう、競技の2日前に毒殺されてしまったのである。

父は知らせをうけてダトゥ・マルフムの所へとんで行き、本当に毒殺されたことを知った。馬の屍には傷があった。何者かが馬の口をあけて毒薬―何だかわからなかった―を無理に飲ませたのである。私は上唇にいっぱい傷を受け、目を開けたまま厩に倒れているパトイをみて、悲しくてならなかった。この馬は、この地区の役人のルブック・アルンのデムナンから400ギルダーで買ったものだった。身体つきのがっしりした栗毛の元気な馬だった。走

り出しはおそいが、ゴール前の100〜150メートルからのラスト・スパートはものすごく、そこで相手を追越すのがつねだった。私は父が、ミナンカバウ中で一番早いチャンピオン馬の所有者になることを望んでいたのに、その希望はあえなく消えてしまった。

その馬に代わる駿馬はどこにいるだろうか。父は方々を探していたが、数ヵ月後にバジャクンブの競走馬の予備レースに出かけて行き、ちょっと細身の赤茶色の毛並みの馬が気に入って1000ドルで買ってきた。その馬はメラ・スリブと名づけられた（メラは赤い、スリブは千という意味である）。 数箇所の競馬で走らせてみたところ、この馬はトラックの4分の3地点くらいまでは早いが、そのあとスピードが鈍るという困った特徴をもっていることが分かった。高価な馬だっただけに父はすっかりがっかりしてしまった。馬が高ければ高いほど優勝の可能性が多い、と信じられていたからである。私は義母から父がこの馬で何回か賭に負けたと聞いた。

父は乗馬用の馬も2頭もっていた。1頭はクダ・ラヤン（ラヤンは影の意）という名前で濃い茶色であり、もう1頭はクダ・ケロパ（ケロパは白）といって白地に黒のまだらだった。クダ・バヤンはケロパより気が荒かったので、私は馬車にはクダ・ケロパをつける方を好んだ。そういうわけで、私は8歳のときにはもうパダンの町をずいぶんよく知っていたが、町の人びとの目から見れば、ずいぶん高慢な少年だったことだろう。

私はあるときのレースの途中、決勝点から150メートルくらいの所でパダン競馬会の会長パセール氏の馬ボブの騎手におこった痛ましい事件のことを、決して忘れないだろう。私はとても悲しかったが、どうしてそんなことになったのかは分からなかった。ボブは真黒いつやつやした毛並みの4、5歳馬だったが、突然騎手が落馬して、あとから来る馬たちに踏まれ、担架で場外へかつぎ出された。何とも痛ましい残酷な事件だった。他の騎手の足が彼の足にふれて、この騎手は落馬したということだった。

私は競馬見物の経験は何度もしていた。しかし興奮と愉快さの頂点でのショックの悲歎、希望と念願が一転して有望な馬が急死したり、騎手や馬が倒れたりするのは、何ともいえぬ衝撃だった。そういうことさえなければ競馬は人を夢中にさせ、飢えもかわきも、雨も暑さも忘れて、レースが終るまで熱中させるものだった。

子供のころ、ハドソン車に乗って町を走らせるとき、私はよくハンドルを握らせてもらったが、父には内緒にしていた。運転手のシ・ブルクは、町の外へ出るとハンドルを握らせてくれたのだが、私はまだ小さくて足がクラッチにもブレーキにもとどかなかった。それでも平気だったのは、他の車が走っていることはほとんどなかったからである。だが私は思い上がっていた。あるとき、ウラク・カランの父のココナッツ農園のそばの橋を渡ろうとしたとき、わずか30メートルほどの向うから、対向車がかなりのスピードで近づいてくるのに気がついた。私はパニックに陥った。もし鉄橋にぶつかったり、道の左側の排水路にでも落ちたら…私は夢中で対向車をよけようとハンドルを切った。その瞬間、運転手が手をのばしてハンドブレーキを引いた。車は危機一髪のところで草むらに乗り上げた。こうして私はま

た、致命的な事故をまぬがれたのであった。

　また、というのはこの事件から数ヵ月まえに、私はあやうく溺れかけたからである。それは父の店から2キロ半ほどのところにあるパリンガム川でのことだった。私は父の、泳ぎにいってはいけないよ、という忠告を無視して、それまでに何回か泳ぎに行っていた。私を溺死から救ってくれたのは友達のマンスールだった。このように私は子供のとき、パリアマンで3度、パダンで2度、生命にかかわるような事故をあやうくまぬがれたのである。私の両親の祈りと祝福が私を救ってくれたのである。アッラーの神よ、どうか私を守りたまえ。